

○研究あれこれ

三十三所信仰と部落—宇陀西国三十三所の場合—

磯 部 信 孝

近畿地方の二府四県と岐阜県にまたがる西国三十三所の観音霊場巡りは今もなお盛んで、巡礼の人が絶えない。

三十三所とは、観音が人々を救済するために33に姿を変えるという信仰にもとづいて、33カ所の霊場が設けられたもので、西国三十三所は平安時代の後期には成立していたといわれる。以後、坂東三十三所や秩父三十三所（のちに三十四所）といったように東日本にも広まる一方、庶民の間にも観音信仰が浸透し、多くの巡礼者が観音霊場を訪ねるようになった。

西国三十三所のすべてを巡るのはたやすいことではないので、江戸時代になると、各地に範囲を限った地域三十三所が作られ、霊場巡りはいっそう盛んになった。地域三十三所は、明治時代以降現代にいたっても新たに設けられるものがあり、その数、全国で600を超えるともいわれている。

こうした地域三十三所は奈良県内にもいくつかあるが、その一つに宇陀西国三十三所がある。宇陀市大宇陀区西山の光明寺を第一番札所とし、第三十三番札所の同区嬉河原の観音寺まで、宇陀市内、つまりもとの榛原・大宇陀・菟田野・室生の旧3町1村にまたがる範囲に33の霊場が設けられていた。いつごろ、どのようにして生まれたかなど詳しいことはよくわからないが、江戸時代末期には御詠歌集も作られており、活発に巡礼が行われていたようすがうかがえる。

しかし、明治時代以降は衰退したらしく、今では巡礼する人もほとんどなく、しだいに人々の記憶から消えようとしている。平成18年（2006）1月から宇陀市となり、新たな歴史を刻もうとしているこの地域にとって、宇陀西国三十三所はどのような意味を持っているのだろうか。

口宇陀ともよばれるこの地域は、大和と伊勢をつなぐ要地として古くから開け、数多くの伝承と多様な歴史に彩られている。33の霊場は、この口宇陀の、江戸時代の村でいえば32カ村にわたって設けられた。霊場となった寺院の宗派も一つではなく、真言宗、融通念仏宗、浄土宗、臨済宗に広がっている。宇陀西国三十三所が、どのような意図から作られたかはわからないが、観音信仰を通じた共通の心情を口宇陀に育て、この地の人々を結びつける役割を果たしたことは確かだろう。

しかし、成立時の33の霊場をみると、この地の被差別部落の寺院も含む浄土真宗寺院がまったく含まれていないことが分かる。これは、むろん部落差別故ではなく、浄土真宗が阿弥陀如来への強い信仰を信者に求め、寺院に観音像を安置することがなかったためだろう。三十三所の信仰も口宇陀のすべての人々を結びつけることは難しかったようである。（史料センター研修員）

